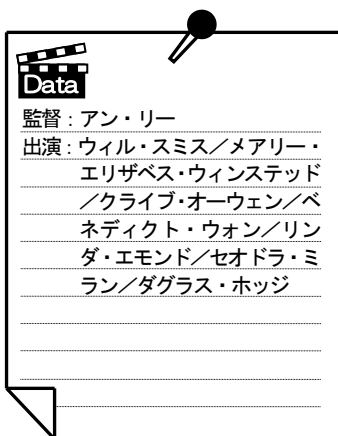




👁️👁️ みどころ

クローン（人間）をテーマにした映画は『わたしを離さないで』（10年）をはじめたくさんあるが、「あなたはもう一人の自分（クローン）と戦えますか？」という問題提起は、本作がはじめて。

アン・リー監督は『ライフ・オブ・パイ／トラと漂流した227日』（12年）でも、素晴らしいCG技術を駆使してベンガル虎をスクリーン上に登場させたが、本作ではウィル・スミスの2倍の出演料を使って、23歳のクローンのウィル・スミスが誕生！

後半には「クローン兵士の是非」という難しいテーマも登場！それをつきつめていけば面白いのだが、娯楽大作に仕上げられた本作ではその点はイマイチ。ジョン・ウー監督流のエンタメ作としては十分楽しめたが・・・。

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— *

■□■あなたはもう一人の自分（クローン）と戦えますか？■□■

本作のチラシには、「あなたはもう一人の自分（クローン）と戦えますか？」の文字が躍っている。そして、チラシの写真の右側には現在の51才のウィル・スミス扮するヘンリーが、左側にはそのクローンである23才の自分が写っている。本作のストーリーは、引退を決意した伝説のスナイパーであるヘンリーが政府に依頼されたミッションを遂行中、何者かに襲撃されるところからスタートする。自分のあらゆる動きが把握され、神出鬼没な暗殺者に翻弄されるヘンリー。しかし、一度はその暗殺者を自分の銃の射程の中にとらえたが、その顔を見ると若き日の自分とより2つだったから、ヘンリーが引き金を引けなかったのは仕方ない。この男は一体何者？ヘンリーと共に暗殺者の正体を突きとめようと

するのが、ヘンリーの監視役として潜入捜査を行っていたアメリカ国防情報局のダニー（メアリー・エリザベス・ウィンステッド）だが、なぜこの2人は共同戦線を組むことに？

『羊たちの沈黙』（91年）では、アンソニー・ホプキンス扮するレクター博士が、ジョディ・フォスター扮するFBI実習生のクラリスを翻弄する姿が印象的だったが、本作では、引退間近のヘンリーが、若いけれども相当しっかりした女性諜報員ダニーと協力し合う姿が印象的。というより、少し単純・・・？

そのため、『羊たちの沈黙』はかなりわかりにくいけれども奥深い映画だったが、本作は論点が明確だし、ストーリーも単純明快だからわかりやすい。もちろん、それが映画の出来を高めているかどうかは別問題だが・・・。

■□■23才のクローン人間を演出したCG技術に注目！■□■

アン・リー監督は、救命ボートの上で虎と同居しながら7カ月以上も太平洋を漂流するという、一見「そんなバカな！」と思える映画『ライフ・オブ・パイ／トラと漂流した227日』（12年）で、「21世紀の千夜一夜物語」とも言うべき面白い物語を見せるとともに、CG合成によるベンガルタイガーという面白い映像を見せてくれた（『シネマ30』15頁）。それと同じように、本作ではウィル・スミス出演料の2倍の費用を払って作ったという、若き日のヘンリーのクローン人間が見せるCG技術に注目！

導入部分でヘンリーが見せる、2km離れた地点から時速288kmで走る列車内の男を狙撃するというシークエンスは信憑性に乏しいが、クローンのヘンリーがスクリーン上で見せるバイク・アクションをはじめとするさまざまなアクションはたしかにすごい。とはいっても、それがかつてのブルース・リーやジャッキー・チェン等々のアクションや、近時の『ジョン・ウィック』シリーズでキアヌ・リーヴスが魅せるアクションをしのぐものかどうかは、これまた別問題だが・・・。

■□■ジェミニとは？クローン人間活用の是非は？■□■

本作のタイトルである「ジェミニ」とは何のことかサッパリ分からなかったが、本作をシネマで見ているうちに、それはかつてヘンリーの上官だった男ヴァリス（クライブ・オーウェン）が、クローン研究の中で作り上げた謎の組織の名称であることがわかってくる。しかし、彼は一体何のためにそんな組織を作ったの？

中東情勢は常に緊張状態にあり、10月28日付朝刊は一斉にISの最高指導者バグダディ容疑者の死亡を報道した。それもビッグニュースだが、中東では既にドローンを使った戦いが繰り広げられているうえ、無人機による爆撃も常態化していることに注目する必要がある。すると近い将来、クローン人間で編成された部隊が登場したり、クローンと人間との銃撃戦が現実化する可能性もある。そう考えると、ヴァリスのクローン研究とジェミニの組織化は当然かもしれない。ちなみに、「ジェミニ」とはギリシア神話でゼウスが誘惑

した女性に産ませた双子の兄弟に由来するそうだから、なるほど、なるほど・・・。

クローン人間を巡る面白い映画が、ノーベル賞作家カズオ・イシグロの原作を映画化した『わたしを離さないで』(10年)だった(『シネマ26』98頁)。また『アイランド』(05年)『シネマ8』136頁)や、『アダムー神の使い 悪魔の子ー』(04年)『シネマ12』108頁)は、クローン人間をテーマとし、生命倫理を真正面から扱った問題作だった。それらに対して本作は、冒頭で述べた通り、51才の今のヘンリーと23才のクローンであるヘンリーとの“対決”を売りにした映画だが、本作はそしてアン・リー監督は、ひょっとしてクローン人間を肯定しているの？

■前半は父子の対立！後半は一転して・・・？■

本作後半からは、それまで対立してきた51才のヘンリーと23才のクローンのヘンリーが和解し、共通の敵であるヴァリスに向かっていくストーリーになっていく。また、かつて上司 VS 部下の関係だったヴァリスとヘンリーが対峙する中、はじめてこの2人によって、武器や兵隊としてのクローンの是非論が議論される。もちろん、ヴァリスは「ジェミニ」という組織が社会的認知を受け、クローンの兵士がアメリカの若者たちの代わりに戦地に赴くことによって、国民が多くの恩恵を受けると主張するのだが、それに対するヘンリーの反論は？

ヴァリスがクローンの第1号のモデルとしてヘンリーを使用したのは、部下だったヘンリーが最も優れた兵士だったため。そのため、クローンのヘンリーはヴァリスにとっては息子同様の存在で、その他大勢の兵器としてのクローンとは全く異なる存在だが、そう聞かされても納得できないのがクローンのヘンリーだ。そのため、怒り狂った彼は自らの手でヴァリスを射殺しようとしたが、それを「絶対ダメだ！」と押しとどめたのが51才のヘンリー。しかして、その理由は？そして、クローンのヘンリーに代わって51才のヘンリーが自ら引き金を引いてヴァリスを射殺したが、それは一体なぜ？本作ラストでは、それをしっかり考えたい。

2019(令和元)年10月28日記